

円)、うち証券会社引受分は45億円(前年同月73億円)となっている。

実体経済の動向

起債状況

(単位・億円、カッコ内は純増ベース)

	42年				
	8月	9月	前年同月	10月 見込み	前年同月
合計	826 (460)	1,016 (694)	657 (394)	894 (595)	740 (479)
事業債	437 (211)	576 (359)	248 (70)	473 (288)	328 (143)
一般	276 (124)	379 (227)	91 (30)	362 (259)	199 (87)
電力	161 (87)	197 (132)	157 (100)	111 (29)	129 (57)
地方債	69 (49)	70 (50)	61 (42)	71 (46)	62 (40)
政保債	320 (199)	370 (285)	348 (283)	350 (261)	350 (295)
金融債	1,517 (431)	1,560 (533)	1,530 (619)	1,891 (795)	1,320 (428)
利付	616 (335)	668 (376)	795 (486)	919 (555)	584 (307)
割引	901 (97)	892 (157)	735 (133)	972 (240)	736 (121)
新規					
規長債	100	1,000	1,200	600	800
証券会社引受分	54	54	70	45	73

◇経済活動は根強い拡大テンポを維持

最近の鉱工業生産、出荷の動きをみると、7、8月両月に伸び悩んだあと、9月は再びかなりの増加となった。9月の生産・出荷が再び増加したことについては、自動車や鉄道車両の著増が大きなきさえとなっている点はいなめないが、基調としては根強い拡大テンポを継続している。

ところで、最近における総需要の動きをみると、今春著増を示したあと一服ぎみに推移してきた民間在庫投資は、9月には製品在庫が本年3月来久々に大幅増を示したものの、原材料、流通在庫投資にはさしたる変化なく、総じてみると、若干の高低はあるにしてもまず横ばい程度で推移している。一方、設備投資は、最近あいついで発表された投資予測調査では、春先の予想を大幅に上回る傾向を示していることや、先行指標である機械受注(海運を除く民需)は、ひとところのような急テンポの増勢こそみられないものの、相変わらず根強い増加基調を継続していること(3ヵ月移動平均の前月比、4月+1.1%、5月+14.3%、6月-1.3%、7月+4.7%)などから推して、引き続き高いテンポで増加を続けているものとみられる。個人消費についても、労働力需給の逼迫を背景に賃金の上昇傾向が続き、米価引き上げなどにより農家所得も大幅な増加を示していることなどから、都市、農村を問わず堅調味を加えているようである。現に、全国百貨店売上げ高が着実な増加を続け(季節調整後の前月比で7月+0.6%、8月+2.1%、9月速報+2.0%)、銀行券発行高がこのところ前年比+16%台の高水準を継続していることはその一端を示すものといえる。また、これまで停滞を続けてきた輸出は、米国向け鉄鋼、繊維の増加などから、ようやくゆるやかながら回復歩調をたどりつつあるよううかがわれる。さらに、財政支出も暫定予算による出遅れを取りもどしつつ

あり、財政資金対民間支払状況などからみて、総需要を押し上げる度合いは徐々に強まっているようである(なお、財政支出繰延べ措置の影響については、目下のところ、建設業界等で先行き警戒観を醸成する心理的効果をもたらす程度にとどまっている)。このように、各需要要因をみると、程度の差こそあれ堅調を続けており、これが総体として経済の根強い拡大をさきえていることは注目される。

(生産——依然上昇基調)

8月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、7月に前月比ほぼ横ばいとなったあと、前月比+1.1%と増勢を回復したが、ここ1両月の伸び率は年初来の増勢(1~6月間の月率+1.31%)を若干下回っている。特殊分類別にみると、一般資本財が化学機械、運搬機械等の反動減から-0.9%といくぶん減少したほかは各財とも増加した。すなわち、鉄鋼製品の好伸や石油製品、非鉄金属製品等の増加などから生産財が+2.5%と大幅に増加したほか、耐久消費財も家庭用電機の減少にもかかわらず、自動二輪車、カメラ等の著増から+1.3%とかなり増加した。このほか、非耐久消費財は繊維製品、食料品が微増にとどまったものの、たばこが著増したため+0.9%の増加となり、建設資材も鉄構物の著減にもかかわらず、亜鉛鉄板、板ガラス、セメント等の増加から+0.8%の増加を示した。また、資本財輸送機械も四輪車は減産したものの、三輪車、自動二輪車の増加から+0.1%の微増となった。

9月の鉱工業生産(季節変動調整済み、速報)は、前月比+2.0%と相当大幅な増加を示した。これには、モデルチェンジ等により7、8月と減少を続けた乗用車の生産本格化による大幅増加や、鉄道車両の著増などの一時的要因が少なからず響いていることを考慮すると、ここにきて一段と増勢が強まったとはみられないが、しかし依然根強い上伸基調を持続していることは明らかである。特殊分類別にみると、一般資本財、建設資材が減少したほかは各財とも増加したが、とくに資本財輸

送機械の増加が目だった。まず、資本財輸送機械は、乗用車、トラック、バス、鉄道車両の著増から+13.9%と大幅に増加し、耐久消費財も輸送機械(軽四輪自動車、自転車)や電気機械(電気洗たく機、冷蔵庫等)などの増加から+5.5%と相当な増加を示した。また、非耐久消費財もたばこは前月著増の反動から減少したものの、繊維製品(綿・スフ織物染色整理、洋服、はだ着)や化学製品(写真フィルム、せっけん)の増加から+1.3%とかなり増加した。生産財は、鉄鋼製品の増加にもかかわらず、石油石炭製品(重油、揮発油)が減少したため+0.4%とこれまでの根強い動きに比べると増加幅は小幅にとどまった。一方、一般資本財は風水力機械の反動減や電気機械(送電配電機器)の減少から-3.3%と前月に続いて減少し、建設資材も亜鉛鉄板、鉄骨、セメント、板ガラス等の減少から-2.8%とかなりの減少となった。

鉱工業生産の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

		41年				42年		
		10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
鉱工業	指数	210.0	218.7	228.6	236.4	233.2	235.7	240.4
	前期(月)比	5.6	4.1	4.5	3.4	0.1	1.1	2.0
	前年同期(月)比	19.3	19.9	20.2	18.8	18.7	18.2	19.6
投資財		7.1	6.9	5.3	2.2	-1.7	-0.4	2.5
資本財		8.7	7.4	5.6	3.3	-1.7	-0.5	3.9
同	(輸送機械を除く)	9.1	6.7	8.4	2.8	0	-0.9	-3.3
輸送機械		7.5	8.1	2.8	4.9	-3.6	0.1	13.9
建設資材		2.3	4.9	3.9	-0.2	-0.9	0.8	-2.8
消費財		2.3	0.4	3.0	3.0	0.1	1.0	3.5
耐久消費財		6.4	2.9	4.2	4.3	0.2	1.3	5.5
非耐久消費財		0	0.1	1.4	2.3	0.6	0.9	1.3
生産財		5.4	5.0	3.6	4.1	0.7	2.5	0.4

(注) 通産省調べ、42年9月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

(出荷——根強い増加基調を持続)

8月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、7月微減(-0.2%)のあと、+0.5%と小幅増加にとどまった。この両月、出荷の動きは年初来の増加テンポ(1~6月間の月率+1.11%)を相当下回り、やや伸び悩みの様相を示しているが、これには一

時的とみられる要因も少なからず響いており、また個々の最終需要の動向や最近の商品市況の堅調な動きなどからみて、この両月の動きをもって直ちに傾向的なものとみることとはできない。特殊分類別にみると、生産財は化学製品が反動減を示したものの、石油製品、機械部品、非鉄金属製品の増加から+1.2%と根強い増勢を持続し、また、前2ヵ月著減した資本財輸送機械も主として鋼船、鉄道車両、自動二輪車の著増から+6.7%と大幅に増加した。一方、耐久消費財は自動二輪車、カメラ等が増加したものの、6、7月に著増した夏物家庭電機の反動減から-1.8%とかなりの減少を示した。また、一般資本財も、化学機械、運搬機械の反動減や農業機械の減少から-2.9%と大幅に減少し、非耐久消費財(-0.2%)も繊維製品の減少から、建設資材(-0.1%)も鉄構物、みがき板ガラス等の減少が響いてそれぞれ微減した。

9月の鉱工業出荷(季節変動調整済み、速報)は前月比+2.1%と大幅な増加を示した。これには鋼船、鉄道車両、乗用車等の著増による面が少なくないが、反面当月減少を示したのものの中にはやや一時的とみられる要因もあり、全体として根強い拡大基調を続けているものとみられる。9月の

鉱工業出荷の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	41年				42年		
	10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
鉱工業	204.0	212.9	219.2	225.1	222.7	223.9	228.6
指 数							
前期(月)比	5.1	4.4	3.0	2.7	-0.2	0.5	2.1
前年同期(月)比	18.0	18.5	17.1	16.9	16.4	14.7	16.9
投資財	5.7	6.9	5.1	1.9	-3.1	1.3	7.0
資本財	6.7	7.6	5.6	2.5	-3.8	1.8	9.2
同(輸送機械を除く)	7.9	6.7	8.4	1.3	0	-2.9	5.7
輸送機械	4.8	9.6	3.2	3.9	-7.4	6.7	25.4
建設資材	3.9	2.5	3.3	0.3	-0.6	0.1	1.2
消費財	4.1	0.1	1.8	2.6	1.6	0.1	1.0
耐久消費財	5.2	3.9	10.0	8.0	6.4	1.8	6.3
非耐久消費財	3.9	1.2	-0.9	1.4	0.4	0.2	0.8
生産財	5.0	4.5	3.1	3.4	1.0	1.2	0.4

(注) 通産省調べ、42年9月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

動きを特殊分類別にみると、資本財輸送機械、非耐久消費財が増加したほかは各財とも減少した。まず、資本財輸送機械は、鋼船、鉄道車両、乗用車、トラック等が軒並み著増したため+25.4%と大幅に増加し、非耐久消費財もたばこ、繊維製品を中心に+0.8%の増加となった。他方、一般資本財は、電気機械や風水力機械の著減を中心に-5.7%と相当減少し(3ヵ月移動平均による一般資本財出荷は6月+2.4%、7月+1.9%、8月-2.8%)、耐久消費財も軽四輪自動車の増加にもかかわらず、6、7月急増を続けた家庭用電機(電気冷蔵庫等)の反動減や精密機械(映画撮影機等)の減少から-6.3%と大幅な減少をみた。また、建設資材は鉄骨の減少を主因に-1.2%、生産財は鉄鋼(粗鋼、熱間圧延鋼材)は増加したものの、船用ディーゼル機関、化学製品の減少が響いて-0.4%とそれぞれ減少した。

(在庫—製品在庫は増加)

8月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は、前月比+0.7%と3ヵ月ぶりに増加した。特殊分類別にみると、一般資本財は繊維機械、農業用機械、エアコンディショナーなどを中心に+7.1%と8ヵ月ぶりに大幅に増加し、建設資材も亜鉛鉄板、板ガラス、セメント等を中心に+1.9%の増加となった。また、生産財(+1.2%)も鉄鋼製品、非鉄金属製品、石油製品等を中心に、非耐久消費財(+0.9%)もたばこ、繊維製品を中心にそれぞれ増加した。一方、耐久消費財は軽四輪車、家庭用電機等の減少から-4.7%とかなり大幅に減少し、資本財輸送機械もトラック、自動二輪車を中心に-2.0%の減少を示した。

上記のような出荷、在庫の動きを映じて、8月の製品在庫率は+2.0%(在庫率指数105.0)と4ヵ月ぶりに上昇したが、大勢として今春来はほぼ横ばい状態に推移しており、その水準は依然低めにとどまっている。特殊分類別にみると、資本財輸送機械、耐久消費財は低下し、生産財が横ばいとなったほかはいずれも上昇したが、とくに一般資本財の上昇(+10.2%)が目だった。

9月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み、速報)は、前月比+3.8%と前月に続いてかなりの増加をみた。この結果、7～9月中の製品在庫増加率は+3.9%と4～6月中の増加率(+1.7%)をかなり上回り、1～3月中の増加率(+4.2%)に近い伸びを示した。9月の動向を特殊分類別にみると、耐久消費財をはじめとして各財とも増加した。まず一般資本財は、エアコンディショナー、計算機等を中心に+8.9%と前月に続いて大幅に増加し、資本財輸送機械もバス、トラック、乗用車等を中心に+4.2%、建設資材も板ガラス、金網等の増加から+1.4%の増加となった。また、耐久消費財は+10.1%と大幅に増加したが、これは主として出荷調整などによる家庭用電機(電気冷蔵庫、掃除機)の急増が大きく響いている。非耐久消費財は、繊維製品(毛織物)を中心に+1.8%の増加を示し、生産財は鉄鋼(冷延鋼板、熱間圧延鋼材)、機械(ドリル、ペンチ、スパナ)を中心に+3.5%と相当増加した。以上のような出荷、在庫の動きを映じて、9月の製品在庫率は+1.6%(在庫率指数106.7)と前月に続いて上昇したが、その水準は本年5月(同106.8)ごろの水準に近く、

鉱工業製品在庫の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

	41年		42年			42年		
	12月	3月	6月	9月	7月	8月	9月	
鉱工業	221.4	230.7	234.7	243.9	233.2	235.0	243.9	
指数								
前期(月)末比	-1.7	4.2	1.7	3.9	-0.6	0.7	3.8	
前年同期比	-2.1	0.5	3.8	8.3	4.4	5.4	8.3	
製品在庫率指数	106.0	107.8	105.2	106.7	104.7	105.0	106.7	
投資財	-1.5	1.8	-3.6	9.1	0.1	3.5	5.3	
資本財	-1.0	0.1	-7.5	11.2	-1.1	4.4	7.7	
同(輸送機械を除く)	3.9	-5.1	-9.8	12.4	-3.6	7.1	8.9	
輸送機械	-8.2	18.6	-7.2	5.3	3.1	-2.0	4.2	
建設資材	-3.1	5.7	4.1	6.3	2.9	1.9	1.4	
消費財	-1.6	9.7	2.0	0.3	-1.7	-0.9	2.9	
耐久消費財	0.6	16.5	-0.2	-3.1	-7.7	-4.7	10.1	
非耐久消費財	-0.3	4.0	3.0	2.4	-0.3	0.9	1.8	
生産財	-2.2	1.2	4.1	4.8	0	1.2	3.5	

(注) 通産省調べ、42年9月は速報。
前年同期(月)末比は原指数による。

依然として低めにとどまっている。特殊分類別にみると、資本財輸送機械が前月に続いて大幅に低下したほかは各財とも多かれ少なかれ上昇した。なお、業種別には鉄鋼、繊維および民生用電機の上昇が目だった。

メーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、5月+4.6%、6月+2.6%と大幅に増加したあと、7月は-0.5%の減少となり、8月(速報)も-0.1%とわずかながら減少を続けた。8月の動きを財別にみると、国産素原材料はパルプ用材、窯業原料(原石)を中心に+2.2%の増加を示したが、輸入素原材料は-0.7%と前月に続いて減少した。これには、スエズ運河閉鎖に伴うタンカー・レートの高騰から、スポット用船による輸入が見送られたことから原油在庫が著減を続けていることや、牛皮が引き続き著減したことが大きく響いており、それ以外の原材料では、綿花が米綿の減収による買急ぎから増加したのをはじめ、鉄鋼原料(鉄くず、鉄鉱石)、生ゴム等もかなりの増加となっている。また、国産製品原材料は機械工業の鋼材、織物業の糸などを中心に-0.6%の減少を示した。一方、原材料消費(季節変動調整済み)は、7月に+1.1%と増加したあと、8月(速報)も+1.1%と根強い増加を続けた。業種別には、石

製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	41年		42年			42年		
	12月	3月	6月	6月	7月	8月		
在庫指数	135.2	141.8	155.0	155.0	154.2	154.0		
前期(月)末比	3.4	4.9	9.3	2.6	-0.5	-0.1		
素原材料	2.6	7.5	11.1	1.7	-3.0	0.5		
うち輸入分	6.5	7.7	8.9	1.2	-3.7	-0.7		
製品原材料	4.1	2.3	8.7	3.3	1.1	-0.7		
うち国産分	4.5	2.3	8.7	3.3	1.0	-0.6		
在庫率指数	66.6	67.0	70.6	70.6	69.5	68.6		
素原材料	64.7	67.9	72.0	72.0	69.4	67.8		
うち輸入分	65.8	68.0	71.2	71.2	67.3	64.7		
製品原材料	71.2	69.9	73.2	73.2	73.3	72.3		
うち国産分	71.0	69.7	73.1	73.1	73.1	72.2		

(注) 通産省調べ、42年8月は暫定。

炭、ゴム、皮革等が減少したほかは各業種とも増加したが、なかでも非鉄、紙・パルプ、石油製品等の増加が目だった。以上のような在庫、消費の動きを映じて、8月の原材料在庫率指数は68.6と前月比-1.3%の低下を示し、とくに輸入素原材料(64.7)は-3.9%と引き続き大幅に低下し、41年1月(64.4)以来の最低水準となった。

次に、販売業者在庫(季節変動調整済み)は、4~6月に+11.6%と急増したあと、7月(速報)も+3.7%と引き続き顕著な伸びを示した。7月の動きを財別にみると、このところほぼ一貫して減少傾向にある国産素原材料は、石炭を中心に-2.7%と引き続きかなりの減少となったが、反面輸入素原材料は繊維原料、電気銅等の著増から+3.0%と相変わらず根強い増勢を示したため、素原材料全体では+0.9%と、5、6月に比べると増勢はかなり鈍化した。引き続き増加した。また、製品も自動車はいくぶん減少したものの、石油製品、織物等が著増したほか、鋼材も増加傾向にあるため、+4.6%と大幅に増加した。

販売業者在庫の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	41年		42年			
			42年			
	12月	3月	5月	6月	7月	
総合指数	196.7	213.5	238.7	229.9	238.7	247.6
前期(月)末比	-1.8	8.5	11.8	2.2	3.8	3.7
素原材料	33.1	-7.4	15.0	5.2	6.7	0.9
製品	-5.5	10.5	11.2	1.6	3.7	4.6

(注) 通産省調べ、42年7月は暫定。

(設備投資——依然高水準ながら先行指標の一部に増勢鈍化のきざし)

設備投資の先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)の動きをみると、8月+5.4%のあと、9月は-23.7%の減少を示した。最近の動きを3ヵ月移動平均によってならしめてみると、5月+14.3%、6月-1.7%、7月+4.7%、8月-9.7%とこのところ増勢はかなり鈍りぎみとなっている。9月の機械受注が大幅な減少を示したことについては、機械メーカーの中に42年度

上期の好調な受注をながめて、期末受注額の一部を10月に繰り下げ、期中の受注額をならそうとする動きがみられたことも少なからず響いており、上記計数からうかがわれるほど機械受注が大幅に減退したとはみられない。9月の動きを業種別にみると、自動車、化学、繊維等は増加したものの、鉄鋼が4ヵ月連続して減少したほか、石油も前月急増の反動で大幅減少を示したため、製造業は-28.2%の著減となった。反面、非製造業(海運を除く)は電力、農林漁業の増加から+1.1%と微増した。

また、同じく先行指標である建設工事受注(民間産業、季節変動調整済み)の動きをみると、8月-9.0%と減少を示したあと、9月はこの反動もあって+12.5%とかなり増加した。3ヵ月移動平均によってならしめても、6月+1.7%、7月+3.9%、8月+3.5%と引き続き根強い増加基調を示している。

需要先別機械受注の推移

(季節変動調整済み、月平均、単位・億円)

	42年			42年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
民需	1,179	1,340	1,353	1,415	1,447	1,199
	(19.1)	(13.6)	(1.0)	(-0.5)	(2.3)	(-17.2)
同(除海運)	1,060	1,300	1,212	1,273	1,341	1,023
	(19.1)	(22.6)	(-6.7)	(-9.9)	(5.4)	(-23.7)
製造業	631	787	756	820	843	605
	(19.7)	(24.8)	(-3.9)	(15.9)	(2.7)	(-28.2)
非製造業	536	566	600	597	597	603
	(16.7)	(5.7)	(5.8)	(-14.4)	(0)	(1.1)
同(除海運)	421	520	452	440	485	432
	(16.4)	(23.5)	(-13.0)	(-36.2)	(10.3)	(-10.9)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

◇商品市況は一部に弱含み気配みられるも、総じて堅調

最近の商品市況をみると、繊維がスフ糸、生糸等を中心に総じて上伸歩調をたどったのをはじめ、セメント、石油、洋紙、基礎薬品類、砂糖等も相変わらず強保合いのない上伸を続けるなど、内需の根強い増加を背景に大勢堅調な動きを

示す商品が目だった。しかし、こうしたなかにおいて、10月にはいつてからは、鉄鋼のうち鋼板類、棒鋼等が再びシリ安きみとなつて、地合いの弱さを露呈したほか、繊維のうち9月末近くに急騰を示した綿糸が小反落し、また、鉛、製材、板紙等もいくぶん小ゆるむなど、一部の商品がこれまでの堅調な地合いを多少とも弱める動きを示した。

このように、最近の商品市況が、大勢としては底堅い動きを続けるなかにおいて、一部の商品が弱気配を示した点は、最近における新しい動きとして注目される。こうした動きの背景には、もとより自主減産計画の足踏みに対するいや気(薄板)、高値抑制策による市場人気の後退(綿糸)など、商品により固有の事情があるほか、景気調整策の発動をみるに及んで、ここにきて年明け後の需要動向ないしは金融情勢に対する漠たる警戒観も出はじめ、これに伴って、実需家や問屋筋の手当て態度が多少とも慎重味を加えつつある(鉄鋼、鉛、製材等)という事情も若干響いているようである。

ただ、こうした動きも市況堅調のうちにおいて一つのアヤを示す程度のもので、軟化の度合いも目下のところごく軽微にとどまっております、全体としてみると、商況の基調はここ一両月と大差なく、引き続き底堅い動きを示しているといえよう。

次に、商品別の動きをやや詳しくみると、まず鉄鋼では、8月末から9月はじめにかけて小反発した鋼板類は、その後メーカー筋の強気の販売態度にもかかわらず、薄板を中心としたホット・コイル製品の荷余り感があらためて認識されたことから、頭打ち商状を呈したが、10月にはいつてからは、早急に具体化するかにみえたメーカーの市況対策が多少の足踏みをみせたことから、相場はシリ安きみとなつた。また、条鋼類については、形鋼は、プライスリーダーの形鋼専業メーカーが、兼業メーカーの進出を阻む意図もあつて、販売価格を低めの水準に据え置いたことなどから安

値を続けたが、10月にはいつて特約店筋が売腰を強めたため、やや持ち直した。この間、棒鋼は値動きに乏しく、こう着ぎみに推移したが、10月央近くには、先行きの需要動向に対する警戒観かたがた、現実に原料くず鉄の値下がりという事情もあつて小幅ながら軟化した。繊維では、綿糸が9月末近くには急騰したほか、スフ糸も10月にはいつて8年ぶりの高値をつけ、また生糸、人絹糸も上値を追うなど、総じて高値波乱を続けた。こうした繊維市況の高騰の背景には、人手不足による供給面の制約、最終需要の堅調、さらに、これらを映じた市場人気の盛り上がりなどの事情が介在しているものとみられる。ただ、綿糸については相場抑制策がとられたため、大きく盛り上がりを見せていた市場人气が多少とも落ち着きを取りもどしたほか、9月の純綿糸日産量が微増するなど、供給面でも需給をいくぶん緩和させる動きが生じてきたため、10月にはいつて小反落となつた。また非鉄では、銅は9月の高値警戒による需要家の買い控えや、米国の産銅スト解決間近しとの観測が一時強まったこともあつて、10月はじめから10月央にかけてやや軟化した。その後産銅ストの長期化見通しなどから、再び強含みとなつた。鉛は、秋需期を迎えて内需は堅調に推移しているものの、輸入玉の入着や山元の増産による需給の緩和から10月にはいつて弱含みとなり、亜鉛は保合い圏内の小浮動を続けた。

次に石油では、メーカー筋に再値上げの意図がうかがわれるものの、C重油の大手需要家向け仕切り価格の引上げ完了、先高を見越した流通段階の備蓄買い一巡、タンカー・レートの小反落などから、冬場の需要期を控えた灯油や軽油の一部が強含んだ程度で、総じてみるとこれまでの騰勢はおさまり、ほぼ強保合いに推移した。またセメントでは、秋需期を迎えて建設業界からの引合いが漸増しているうえ、九州地区では水不足による減産懸念も生ずるに至つたことから、引き続き堅調に推移した。木材では、国内原木は大勢堅調に推移したが、製材は農繁期による産地の出荷減にも

かかわらず、仲間問屋筋が景気の先行きを警戒して、依然慎重な手当て態度を示したためやや弱含みとなった。また、カセイソーダ、カーバイド等基礎薬品類は、国内実需が堅調を持續していることから引き続き強含みとなったが、高圧ポリエチレン等の石油化学製品は、先行きの新鋭設備稼働による需給緩和見通し、これを映じたメーカー間の販売競争激化から軟化傾向を続けた。さらに、紙では、洋紙は秋需期を迎えて荷動きが活発化しているため、引き続き強含みに推移したが、板紙は10月にはいってメーカー間の生産調整の足並みがやや乱れたこともあって多少とも弱気配を示した。この間砂糖は、公取委が闇カルテルの疑いで事情聴取を行なったことなどがいや気され、9月後半には上げ一服商状を呈したが、その後市中玉不足があらためて表面化し、再びかなり上伸した。

(卸売物価——引き続き上伸基調)

9月の卸売物価は、前月比+0.5%と8月(同+0.4%)に引き続きかなり根強い騰勢を示した。こ

れは鉄鋼が、くず鉄、鋼管、亜鉛鉄板等を中心に低下したものの、木材・同製品(国内原木、合板)、が相当の値上がりを示したのをはじめ、繊維(綿糸、生糸、人絹糸、原綿)、食料(鶏卵、精製糖)、石油・石炭(原油、燃料油、原料用炭)が軒並み上昇したためである。また、工業製品も+0.4%と前月(+0.2%)に引き続き騰勢を強めた。なお、10月にはいってからの動きをみると、上旬中は消費者米価の引上げによる食料の大幅上昇が響いて前旬比+0.7%と一段と騰勢を強めており、工業製品価格も鉄鋼などの軟化にもかかわらず+0.1%と引き続き上昇を示した。もっとも中旬にはこれまで値上がりの目だった木材、食料が小反落したこともあって前旬比-0.1%の微落となった。

(消費者物価——騰勢さらに強まる)

9月の消費者物価(東京)は、8月に久方ぶりで見舞った(+0.7%)あと、前月比+2.4%と目だって上昇した。これは、食料品が台風の影響や夏物の入荷一巡による生鮮食品(野菜、鮮魚)の急騰な

卸 売 物 価 指 数 の 推 移

(単位・%)

	ウ エ イ ト	下 降 期 (ピーク 38/11) 38/11 →40/7	上 昇 期 (ボトム 40/7) 40/7 →42/9	最 近 の 推 移							
				42 年			42 年 9 月			42年10月	
				7 月	8 月	9 月	上 旬	中 旬	下 旬	上 旬	
総 平 均	100.0	- 0.7	+ 7.6	+ 0.2	+ 0.4	+ 0.5	+ 0.3	保 合	+ 0.2	+ 0.7	
食 料 品	16.4	- 0.4	+ 7.0	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.9	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.7	
繊 維 品	12.9	- 8.0	+ 16.2	+ 0.2	+ 0.5	+ 1.3	+ 0.5	+ 0.6	+ 0.8	+ 3.6	
鉄 鋼	10.2	- 3.4	+ 3.4	+ 0.3	- 1.4	- 1.2	- 0.1	- 0.4	- 0.3	- 0.1	
非 鉄 金 属	4.5	+ 18.4	+ 10.6	- 0.8	+ 1.3	+ 0.3	- 0.2	- 0.3	+ 0.9	+ 0.3	
金 属 製 品	3.5	+ 4.1	+ 6.4	+ 0.5	- 0.1	- 0.1	+ 0.1	保 合	- 0.1	保 合	
機 械 器 具	20.2	- 0.6	+ 1.3	+ 0.1	保 合	+ 0.1	保 合	+ 0.1	- 0.1	保 合	
石 油 ・ 石 炭	5.2	+ 1.0	- 1.6	+ 0.3	+ 0.8	+ 0.7	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	
木 材 ・ 同 製 品	6.1	- 2.7	+ 33.9	+ 0.8	+ 2.4	+ 2.3	+ 1.9	- 0.8	保 合	+ 0.1	
窯 業 製 品	3.0	- 0.8	+ 6.9	保 合	+ 0.4	+ 0.3	保 合	保 合	+ 0.4	+ 0.1	
化 学 品	7.4	+ 1.9	- 3.0	- 0.2	+ 0.2	- 0.1	保 合	保 合	保 合	保 合	
紙 ・ パ ル プ	3.3	- 0.3	+ 4.4	- 0.1	- 0.2	+ 0.1	保 合	保 合	+ 0.1	- 0.1	
雑 品 目	7.5	+ 1.1	+ 5.9	保 合	- 0.4	保 合	保 合	+ 0.1	保 合	保 合	
工 業 製 品	79.5	- 1.4	+ 5.8	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.4	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	
非 工 業 製 品	20.5	+ 1.5	+ 14.1	+ 0.6	+ 0.6	+ 1.0	+ 0.6	- 0.3	+ 0.2	+ 2.6	
非鉄・食料を除く 総 平 均	79.1	- 1.8	+ 7.7	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.5	+ 0.4	- 0.1	+ 0.2	保 合	

(注) 本行調べ、35年基準指数による。

どから、大幅に上伸したのに加え、被服も秋需期入りと原糸、織物高を映じて大幅な上昇を示したことによるものである。なお10月は、消費者米価や都営交通・私鉄バス料金の引上げが大きく響いて食料が大幅な値上がりを示したほか、住居、光熱、被服、雑費も軒並みに上昇したため、前月比+1.5%と引き続きかなりの騰勢を示した。季節商品を除いてみても、前月比+1.2%と相当な上昇が続いている。

(輸出入物価——輸出物価は続騰、輸入物価は続落)

9月の本行輸出物価は、前月比+0.2%と引き続き上昇し、5か月にわたる続騰となった。これは、国内市況の堅調を映じて繊維品(綿糸布、絹織物、二次製品)がかなりの上昇を続けたほか、食料品(乾燥しいたけ、まぐろ、かにかん詰め)も上昇したため、反面、金属(鉄鋼)、化学(尿素)は下落した。一方、輸入物価は、豊作予想による食料品(小麦、大豆、とうもろこし)の続落や金属

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

	ウエイト	前年度比 上昇率		最近の推移			最近の 前月 同月 比	
		40年度 平均	41年度 平均	42年				
				8月	9月	10月		
消費者物価 (東京)	総合(季節商品を除く)	100.0	+6.8	+4.7	+0.7	+2.4	+1.5	+5.4
	食料	91.4	+6.2	+4.9	+0.3	+1.3	+1.2	+4.3
	住居	40.9	+8.1	+3.0	+1.7	+4.2	+3.5	+8.9
	光熱	10.7	+4.4	+5.7	保合	+0.2	+0.3	+3.4
	被服	4.5	+0.4	0	保合	+0.1	+0.9	-0.2
	雑費	13.0	+3.8	+3.6	-0.2	+4.3	+0.5	+3.0
		31.0	+7.5	+7.9	保合	+0.4	+0.1	+3.5
	総合(季節商品を除く)	100.0	+6.4	+4.7	+0.8	+1.6		+4.1
		91.4	+6.1	+4.7	+0.1	+0.9		+3.1
	小売物価 (5万円以上)	総合	100.0	+7.4	+4.6	+0.8	+1.6	
	91.3	+7.0	+4.6	+0.2	+0.9		+3.1	
輸出入物価 (契約ベース)	輸出		-0.7	+1.4	+0.2	+0.2		+1.2
	輸入		-1.0	+0.7	-0.7	-0.1		-1.1
	交易条件		+0.3	+0.6	+0.9	+0.3		+2.3

(注) 消費者物価(40年基準)は総理府調べ、小売物価(40年基準)、輸出入物価(35~37年基準)は本行調べ。

(鉄くず)の低下から、前月比-0.1%と引き続き微落した。この結果、交易条件指数は前月比+0.3%と引き続きかなりの好転を示した。

◇総合収支、小幅の黒字を持続

9月の国際収支は、貿易収支が季節的事情もあって黒字幅をやや拡大したほか、長期資本収支の赤字が比較的小幅にとどまり、また、短期資本収支も引き続き入超となったことから、総合では、ほぼ前月並みの黒字(42百万ドル、前月同38百万ドル)となった。

まず貿易収支(季節調整済み)は、輸出が前月に続き回復歩調を示したが、輸入も相変わらず増勢基調を改めていないため、差引き黒字額は4~6月平均並みの100百万ドルと小幅の改善にとどまり、貿易外収支や長期資本収支の大幅赤字を補うにはなおほど遠い状態にある。次に、貿易外収支では、石油輸入の入着集中から、スエズ紛争によるフレート高の影響が比較的大きく現われたことなどにより105百万ドルの大幅逆調となった。一方、資本収支では、長期資本が、船舶輸出増加に伴う延払信用供与や、ガリオア・エロア債務の返済などの流出要因があったものの、反面、世銀借

国際収支

(単位・百万ドル)

	42年			42年			前年 同月
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月	
經常収支	△58	△55	46	66	23	50	163
貿易収支	51	59	149	170	116	161	235
輸出	742	832	891	881	887	905	837
輸入	691	773	742	711	771	744	602
貿易外収支	△88	△98	△92	△89	△83	△105	△62
移転収支	△21	△16	△10	△15	△10	△6	△10
長期資本収支	△61	△64	△74	△77	△77	△67	△116
短期資本収支(注1)	44	63	28	9	62	31	3
誤差脱漏	△20	△13	5	△44	30	28	34
総合収支	△95	△69	5	△64	38	42	84
金融勘定(注2)	△95	△69	5	△64	38	42	84
外貨準備増減	1	1	△17	△38	△54	△40	△19
その他	△96	△68	23	△26	92	2	103

(注1) 金融勘定に属するものを除く。

(注2) 金融勘定の△印は純資産の減少。各期月平均。

款、証券投資、民間インパクト・ローンの流入などが多額に上ったため、67百万ドルの逆調と、ここ数ヶ月に比べ小幅の流出超にとどまった。一方、短期資本収支では、引き続きBCユーザンスの利用が増加し、流入超を続けた。

金融勘定では、為替銀行段階で輸出手形の買持ち増がみられたものの、期末における資金繰り面への配慮もあって、再び外銀借入れをふやす動きが見られたことや、海外短資の取り入れが進歩したことなどから、対外支払ポジションは小幅の好転にとどまり、他方、外貨準備は4ヶ月ぶりで40百万ドルの増加となった。

9月の輸出は、前月に引き続きかなりの回復を示し、前年同月比で+8%、季節調整後でも前月比+4%の増加となった。最近の動きを3ヶ月移動平均値(季節調整済み)の前月比でみると、5月+1%、6月-1%、7月+2%、8月+2%と、ここ一両月その足どりはなお鈍いにしても、ようやく持ち直す動きを示している。商品別(通関ベース)にみると、綿・合繊織物の不振を映じ繊維品が前年同月を大きく下回ったが、4月以来前年の水準以下に落ち込んでいた鉄鋼が、前月に続きわずかながらも前年同月を上回った。また、機械類でも、テレビがやや伸び悩んだほかは、ラジオ、テープ・レコーダー、自動車、船舶、光学機械等は引き続き順調に増加した。地域別では、香

輸出入指標の推移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支			通関			信用状			輸出 認証	輸入 承認
	輸出	輸入	貿易 じり	輸出	輸入	輸出	輸入	差			
41年 10~12月	851	673	178	868	864	679	381	298	885	817	
42年 1~3月	829	685	144	848	908	675	394	281	905	866	
4~6月	840	740	100	856	944	675	377	298	874	952	
7~9月	865	779	86	887	984	689	379	310	902	973	
42年 5月	822	742	80	842	955	655	387	268	879	905	
6月	843	774	69	861	969	703	373	330	877	1,130	
7月	822	746	76	840	940	672	368	304	870	948	
8月	867	787	80	895	995	697	396	301	890	1,000	
9月	905	805	100	926	1018	698	375	323	947	971	

(注) 季節調整はセンサス局法による。各期月平均。

港、南ベトナム向けの低調が響いて、東南アジア向けが小幅の増加にとどまったが、米国向けは、鉄鋼、機械等の伸長から、久方ぶりに前年同月に比べ約1割増程度の伸びを示した。

先行指標では、輸出信用状が季節調整済みで8月にやや水準を高めたあと、9月はほぼ横ばいとどまったが、10月にはいり再び増加傾向にあり、また輸出認証もここ一両月増勢を示している。もっとも、地域別では東南アジア向けは伸び悩みを続けるなど問題なしとしないが、総じてようやく回復過程にはいったとみられ、今後輸出は徐々

輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	42年			42年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
合計	664 (+ 5)	689 (+ 3)	700 (+ 3)	693 (+ 3)	725 (+ 2)	682 (+ 3)
食料品	26 (- 10)	25 (- 1)	31 (+ 7)	27 (+ 4)	32 (+ 15)	33 (+ 3)
水産品	18 (- 12)	16 (- 1)	23 (+ 9)	22 (+ 31)	23 (+ 14)	22 (- 11)
繊維製品	117 (+ 4)	112 (- 4)	111 (- 15)	116 (- 8)	111 (- 25)	106 (- 10)
綿製品	21 (- 20)	19 (- 24)	18 (- 38)	17 (- 38)	19 (- 44)	17 (- 31)
化学製品	50 (+ 1)	58 (+ 14)	45 (- 6)	46 (- 6)	50 (+ 8)	39 (- 21)
肥料	12 (- 26)	17 (+ 5)	10 (- 22)	9 (- 34)	15 (+ 38)	6 (- 57)
金属製品	141 (- 2)	143 (- 1)	150 (+ 5)	150 (+ 1)	160 (+ 14)	142 (+ 1)
鉄鋼	129 (- 2)	132 (- 1)	140 (+ 7)	138 (+ 2)	151 (+ 17)	132 (+ 2)
機械	195 (+ 15)	203 (+ 9)	218 (+ 13)	212 (+ 18)	223 (+ 8)	219 (+ 13)
船舶	9 (- 6)	6 (- 31)	9 (- 10)	7 (- 5)	13 (+ 66)	7 (- 53)
自動車	51 (+ 17)	51 (+ 12)	43 (+ 19)	42 (+ 19)	43 (+ 12)	45 (+ 26)
その他	135 (+ 3)	148 (+ 2)	145 (+ 4)	142 (+ 1)	149 (+ 4)	143 (+ 8)
米国	263 (+ 1)	282 (+ 2)	293 (+ 9)	297 (+ 10)	291 (+ 6)	290 (+ 11)
アジア	196 (+ 15)	196 (+ 8)	198 (- 5)	193 (- 4)	211 (- 6)	191 (- 4)
欧州	75 (- 8)	72 (- 2)	66 (- 4)	67 (- 3)	69 (+ 1)	63 (- 11)
その他	130 (+ 6)	139 (+ 2)	143 (+ 4)	136 (+ 4)	153 (+ 6)	138 (+ 2)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	42 年			42 年		
	1~3月	4~6月	7~9月	7月	8月	9月
食料品	148 (+ 15)	154 (+ 7)	145 (+ 7)	131 (+ 17)	168 (+ 22)	137 (- 14)
原燃料	473 (+ 18)	481 (+ 20)	503 (+ 18)	488 (+ 16)	527 (+ 28)	494 (+ 10)
羊毛	32 (- 7)	30 (- 15)	28 (- 15)	27 (- 21)	32 (+ 2)	25 (- 26)
綿花	44 (+ 14)	31 (+ 18)	32 (+ 1)	27 (- 15)	40 (+ 46)	30 (- 19)
鉄鉱石	45 (+ 25)	47 (+ 29)	49 (+ 15)	47 (+ 31)	49 (+ 10)	50 (+ 7)
鉄鋼 くず	26 (+ 236)	33 (+ 220)	27 (+ 91)	31 (+ 154)	23 (+ 56)	28 (+ 75)
非鉄 金属鉱	22 (+ 38)	21 (+ 13)	27 (+ 24)	25 (+ 17)	27 (+ 10)	29 (+ 49)
木材	58 (+ 31)	72 (+ 38)	80 (+ 46)	73 (+ 38)	91 (+ 73)	76 (+ 29)
石炭	26 (+ 35)	27 (+ 50)	26 (+ 25)	26 (+ 8)	26 (+ 71)	25 (+ 11)
石油	109 (+ 10)	102 (+ 23)	109 (+ 19)	104 (+ 19)	108 (+ 22)	113 (+ 16)
化学製品	50 (+ 25)	53 (+ 27)	56 (+ 30)	55 (+ 29)	58 (+ 36)	54 (+ 26)
機械	68 (+ 49)	155 (+ 171)	89 (+ 50)	81 (+ 34)	96 (+ 67)	90 (+ 49)
鉄鋼	31 (+ 265)	32 (+ 222)	38 (+ 145)	41 (+ 198)	39 (+ 194)	34 (+ 74)
その他	81 (+ 62)	94 (+ 45)	102 (+ 68)	106 (+ 68)	105 (+ 77)	95 (+ 58)
合計	851 (+ 26)	969 (+ 35)	933 (+ 26)	901 (+ 27)	994 (+ 37)	904 (+ 14)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

ながらも上昇歩調をたどるものと見られる。

9月の輸入は、前年同月比で+23%、季節調整後前月比で+2%と、依然根強い増勢を示している。品目別(通関ベース)では、前月メーカー原料在庫率の低下が目だった原油、石炭をはじめ、鉄鉱石、くず鉄、銑鉄、木材等が相変わらず高水準を続け、化学製品、工作機械もかなり増加した。反面、とうもろこし、小麦等の減少から食料品が小幅の伸びにとどまり、羊毛、大豆等も引き続き前年水準を下回った。

先行指標の輸入承認は、前年同月比で8月+37%と相当な増勢を示したあと、9月は+14%と比較的小幅の増加にとどまった。品目別の動きをみると、化学製品や、機械等の増勢は相変わらず目だっているが、鉄鉱石、くず鉄、銑鉄等の伸び率はここにきていくぶん鈍りぎみとなっている。また、繊維原料や食料品は前月かなり増加したあと、9月はいずれも前年水準を下回った。このような先行指標の動きから推して、輸入の先行きにはやや落ち着き気配がうかがわれる。